

12月25日のウクライナ情報

安齋育郎

●ウクライナで戦ったイギリス人傭兵のインタビュー(2022年12月)

- ①3月にウクライナ入りして向かった傭兵訓練所が次の日カリブルミサイルで攻撃されて100人以上死亡。
- ②その後彼がいた1000人ほどの傭兵部隊のうち、700人が家に帰った。彼の分析によると「Call Of Dutyみたいにバンバン撃ってロシア人殺しに来たやつらは、現実が違うって思ったんだろ。」
- ③軍隊経験がない方がウクライナに残れたと言っている。元アメリカ軍やイギリス軍兵は、寒いのがヤダ、危ないのがヤダ、武器が古いのがヤダ、こんな装備やだ、バンバン殺せず砲撃に合うのがヤダ、と言って帰って行った。
- ④ウクライナ軍高官の護衛の仕事したけど、西ウクライナは平和で、一日中座って煙草を吸っていた。
- ⑤武器を東部に運ぶ仕事で、トラックにパンパンに銃を詰め込んで運んでいる途中、ある朝車列のうちの2台が忽然と消えていた。5キロおきに検問があるのに、消えるのは、軍隊が組織的にどうにかしているんだと思う。(横流しで世界のテロリストに渡るんだよ)



●マクロン:ヨーロッパは、NATOの枠組み内を含め、米国からの自立を求めるべきだ(2022年12月22日)

「ヨーロッパ諸国は、NATOの枠組み内を含め、ワシントンからの自立を求めて、自国の利益を保護する必要があります」と、フランスの指導者エマニュエル・マクロンが述べました。

ルモンドとのインタビューで、彼は北大西洋同盟に「本当のヨーロッパの支援」を生み出す意向を発表しました。フランス大統領が説明したように、ウクライナの紛争はヨーロッパ諸国の脆弱性とアメリカ当局への依存性を示しました。

「ヨーロッパは米国から技術的自治権を獲得し、軍事的に自律的でなければならない」とマクロンは強調しました。

以前、フランスの首長は、ウクライナでの特別軍事作戦の完了後、ロシアに安全保障の提供を求めました。彼によると、紛争の解決に関する和平交渉はモスクワの参加なしには不可能です。



●ウクライナ軍、ドネツクのホテルを砲撃(2022年12月22日)

ロスコスモス(ロシアの宇宙開発の国営企業)の元 CEO・ロゴジン氏の誕生日パーティーをしていたドネツクのホテルを、ウクライナ軍が砲撃した。ウクライナ軍は155口径の砲弾を使用した。ロゴジン氏は背中を怪我したが、ホテル従業員 1 人が命を落とした。

ドネツク州議会のアレクセイ・ジュラブレフ副議長がタス通信に明らかにしたように、当ホテルはドネツク郊外のシェシュベシュホテルで、当時ロゴジンと軍事顧問団「ツァー・ウルフ」のホツェンコ団長が宿泊しており 1 名が死亡、数名が負傷した。この建物は誰かの密告によって砲撃され、合計 3 発が正確に命中したという

<https://twitter.com/tobimono2/status/1605788653891919872?t=RP601cegfqediQ0xhYud9A&s=09>



●タッカー・カールソンのゼレンスキー訪米評(2022年12月22日)

タッカー・カールソン:「ゼレンスキーはストリップクラブの支配人のような姿でワシントンに現れ金を要求する。我々の高齢化した指導者層は、崩壊した経済から彼に数十億を与えるだろう」。

※安斎評:それにしても譬え方がすごいねえ。行ったことがないから、ストリップ・クラブの支配人がどんな格好してるのか、想像がつかないですが。



●米退役中佐ダニエル・デビス氏のゼレンスキー批判(2022年12月22日)

ゼレンスキーは演説の中で西側の軍事援助が十分でない、米国にもっと武器を提供するよう要求し

たが、「どんな基準で不十分と言うのだろうか。我々はウクライナに何も提供する義務はない。我々は既に莫大な額の資金と軍備を提供している。同盟国とも呼べない国に対して」と指摘した。



※安齋注:アメリカや西側同盟国の心配は、ウクライナ支援をやめたらウクライナがあっけなく軍事的にロシアに負けて、「ロシア勝利」で終わるので、それだけは避けたいために、どこか着地点を見定めようと「やめるにやめられない状態」に陥っているのでしょうか。それにしても、NATO 諸国が寄って集って膨大な支援をしているのも関わらずロシアが持ち堪えているのは驚くべきことです。支援総額は970億ドルで、ロシアの国王予算の約1.5倍ですね。アメリカもゼレンスキーの身勝手さや独断専行ぶりなどには嫌気がさしているでしょうが、アメリカにとっても「明白なウクライナ負け」では困るので、民主党・共和党の潜在的緊張関係を孕みながらも、かっこ悪い負け戦にいないため、しぶしぶでも支援を続けているのでしょうか。それにもかかわらずロシアのプーチン大統領が「すべての目標を達成する」なんて発言するのは、アメリカにもイヤでしょうね。歴史認識がいい加減なゼレンスキーが領土の線引きでも1991年の国境線みたいな非現実的なことを持ち出したりするから、アメリカはもしかすると「ゼレンスキーの次」を見ているのかもしれない。今度のは卒業旅行かな。アメリカのメディアは、米国訪問中のウクライナ大統領が、ウクライナ軍に「より強力な武器を供給する必要性」を西側に納得させることができなかつたと報じました。ワシントンポストによると、キエフは来年大規模な攻撃を開始することができないと見立てています。

次の記事もこの問題にかかわっています。

●米ウクライナ会談:ロシア阻止まで支援絶やすな(2022年12月22日)

ウクライナの大統領ゼレンスキーが訪米し、バイデン大統領とホワイトハウスで会談した。ロシアが2月にウクライナに侵攻して以降、ゼレンスキー氏が外国を訪問するのは初めてだ。

ゼレンスキー氏が危険を冒して渡米したのは、長期化が必至なロシアとの戦いと、国民生活の実情を米国の政権や世論に直接訴えかけ、最大の「命綱」である米国からの十分な支援を確保することを目指すためだ。

バイデン氏はこれに応え、ゼレンスキー氏が繰り返し求めていた露軍のミサイルを迎撃するための地对空ミサイルシステム「パトリオット」の初供与を含む、総額18億5千万ドル(約2450億円)規模の軍事支援を伝えた。

ウクライナでは東部や南部で激戦が続く一方、露軍がベラルーシを経由して中部や西部に侵攻する構えも見せている。露軍はミサイル攻撃で電力インフラを破壊し、多くのウクライナ市民が凍死する事態も懸念される。この冬を越せるかどうかは、国の存亡に関わる一大事だ。

米国および国際社会は、他国の主権を侵害して自らの領土的野心を満たそうとするプーチン露大統領の横暴を阻止するため、ウクライナを力強く支え続けていかななくてはならない。

バイデン氏は会談後の共同記者会見で「ウクライナがある限り、私たちはウクライナとともにある」と強調した。国際社会による支援を主導する米国が揺るぎない連帯を打ち出したことは、大いに歓迎したい。

バイデン氏がこのタイミングでゼレンスキー氏を招いたのは、11月の中間選挙で下院の多数派を奪還した共和党が対ウクライナ支援を見直す構えを示していることを視野に置いたものだろう。ゼレンスキー氏もこうした動きを意識し、会談後の上下両院合同会議での演説で「米国の資金は慈善行為ではなく、世界の安全と民主主義のための投資だ」と述べて満場の拍手を浴びた。米議会はこの呼びかけに応え、党派的な思惑に左右されることなくウクライナ支援に力を尽くしてほしい。

日本への期待も大きい。軍事的な支援には制約があるにしても、政府や民間が連携してできることは多いはずだ。一時避難民への支援拡大なども含めた、きめの細かい対応を目指したい。



●ウクライナのネオナチからポーランドとハンガリーにメッセージ(2022年12月22日)

<https://www.youtube.com/watch?v=HGSz-JLzTnI>

※安齋注:こわいですよ～～！



君たちハンガリー人とポーランド人がウクライナの領土を狙っていることはよく承知している。

●戦争を売る:レポートは、ドイツのメディアが社会の過激派を掻き立て、ロシアとの交渉を防ぐためにどのように働いているか(2022年12月22日)

<https://www.rt.com/news/568595-how-to-sell-war/>

衝撃的な研究は、マスコミが EU の最も強力な州でモスクワとの対立をどのように推進しているかを明らかにします。

先週、マインツ大学は、ウクライナでの出来事に関するドイツのニュース報道と、危機に対するベルリンの公式対応に関する研究を発表しました。結論は、2月24日以降、メディアが紛争を継続し、交渉による解決の可能性を低くする上で主要な役割を果たしてきたことを確認しています。

大学の研究者は、2月24日から5月31日までのウクライナ紛争に関するドイツ語の報道を分析し、国の8つの主要な新聞とテレビ局(FAZ、南ドイツ新聞、ビルト、シュピーゲル、ツァイト、ARD タゲ

シャウ、ZDFトゥデイ、RTL アクトゥエル)が発行した約 4,300 の個別の記事の内容を評価しました。

この間、ウクライナは全報道の 64%で肯定的に描かれ、ウラジミール・ゼレンスキー大統領は 67%で肯定的に描かれました。対照的に、ロシアは 88%の確率で「ほぼ独占的に否定的に」描かれ、ウラジミール・プーチン大統領は 96%のケースで描かれました。ほとんどすべての報告(合計 93%)は、戦争の唯一の責任をプーチンおよび/またはロシアに帰した。西側はわずか 4%の事例で「共同責任」として指名されましたが、ウクライナは 2%とさらに少ないです。

紛争に関するロシアの見解は、ニュース報道の 10%でのみ考慮または言及されており、モスクワの近隣諸国を含む他のどの国の視点よりも少なかった。ウクライナへの武装と戦闘の長期化に反対するドイツと左翼党の代替案は、「戦争に関する報道においてメディアの存在感が事実上なかった」。閣僚からの政府のメッセージと声明は完全に支配的であり、ニュース報道の 80%で焦点であり、野党の数字の 4 倍以上でした。

「戦争を終わらせる可能性が最も高い措置」に関するメディアの議論では、ロシアに対する経済制裁は「群を抜いて最も頻繁に報告され」、66%のケースで承認されました。外交措置は「はるかに少ない頻度」で言及されましたが、「人道的措置」はさらに定期的に取り上げられていませんでした。

全体として、調査対象のレポートの 74%は、ウクライナへの軍事支援を「非常に前向きに」描写しています。重火器の引き渡しは「やや明確ではないが、それでも大部分が賢明であると考えられている」と支持され、66%が「圧倒的に賛成」した。外交交渉が有益であるという印象を与えたのは半数未満(43%)でしたが、これは主に、外交がベルリンにとって「はるかに」賢明な選択肢であることを明確に示したデアシュピーゲルの報告によるものでした。

「シュピーゲルは、重火器の配達よりも外交交渉を肯定的に評価するために調査された唯一のメディアでした」と学者は結論付けています。

報告書は、メディア報道が「確かに親政府ではない」1 つの分野を特定しました。まれに、オラフ・ショルツ首相と彼の連立は、シュピーゲルを除くすべてのアウトレットから「ウクライナを重火器で氾濫させることを躊躇した」と強く批判されました。

報告書は、「政府のすべてのメンバーが批判によって等しく影響を受けたわけではない」と付け加えている。非難を免れた人々はリストされていませんが、彼らが初日からベルリンがキエフを武器で氾濫させることを要求してきた緑の党などの政府連立政党の代表者であることは間違いありません。

しかし、全体として、この研究は、ドイツのメディア全体が戦争の原因とロシアに対する危険なエスカレーションの背後にどのように並んでいたかについての不穏な見方を提供します。一方、外交的解決を支持したり、ウクライナにできるだけ早く戦闘を終わらせるための生産的な交渉に従事するよう促したりするなどの代替政策の検討は、ニュース報道や分析からほぼ完全に欠如しているか、実際に完全に差し控えられていました。

また、ジャーナリストが戦争に対して最も攻撃的で効果的なロビイストの一人であることも示しています。ドイツはたった一つの国であり、西側諸国での紛争に関するメディア報道の同様の調査は必然的に同様の結論に達するでしょう。多くの場合、マスコミが平均的な市民に提示する一方的な戦争前の状況と、反対の外交を支持する視点の欠如という点で、調査結果はさらに劇的である可能性があります。

これは、ロシアとの代理戦争を最も熱心に推進している両国である英国と米国に確実に当てはまるでしょう。キエフとモスクワは 4 月初旬に交渉による暫定和解に達し、それによってロシアは 2 月 24 日以前の立場に撤退し、ウクライナは多くの国からの安全保障と引き換えに NATO 加盟を求めない

ことを約束したことが確認された。

しかし、土壇場で、当時の英国首相ボリス・ジョンソンがキエフに飛んで、ゼレンスキーに会談から離れるよう要求したと伝えられている。この衝撃的な事実は英語のニュースではほとんど言及されていませんが、これは私たちを驚かせるべきではありません。

これらの組織と彼らのために働くジャーナリストは、売るために永遠の戦争をしているようです。それが起こるために、西側の大衆は、死と破壊に代わる手段によって平和を達成することが可能であることを知ることを許されないようです。マインツ大学の研究が証明しているように、紛争が彼ら自身の経済と私生活に与える影響についてヨーロッパ人を誤解させることも必要であるように思われます。

2月24日から5月31日の間に、エネルギー不足や価格インフレなど、「ドイツに対する戦争の影響」に言及またはそれに関する報告の割合は、週の合計で15%を超えることはありませんでした。国のメディアがこの被害を認識し始め、それが平均的な市民にとって何を意味するのかを探求し始めたのはごく最近のことです。国民の大多数は、巨大な不況が来るのを見ていないか、それが自傷行為であるという考えを持っていないかもしれません。



●欧州各地の抗議デモ(2022年12月22日)

オーストリア、ウィーン:物価の引き下げ、ロシア制裁の解除を要求

チェコ、プラハ:生活水準低下、政府の国民への支援の乏しさへの抗議

ドイツ、ベルリン:ロシア制裁解除とロシアからガスと石油の輸入を要求

イタリア、ローマ:インフレ、光熱費高騰への抗議

https://twitter.com/Tamama0306/status/1578750871126831104?t=LzBc0VttmP9IXIW_eojaPg&s=09



●ゼレンスキー訪米の意味を考える(原伸一、2022年12月22日)

原伸一:「ゼレンスキー訪米は 1.7 兆ドル歳出法案を通すための演出」


※安齋注:私もこの見方に傾いています。元役者はうまいこと便利に使われたんでしょうね。いかにも傀儡政権らしい使われ方です。手玉に取られています。

<https://www.youtube.com/watch?v=uW3sqD0XuKM>

恐れ入ります。現在動画を制作している余裕がなく、ゼレンスキーのワシントンDC訪問について一言だけ、述べさせていただきます。

共和党に下院の主導権が移る前にウクライナ支援の継続を確定させるために、その予算を確保すべくゼレンスキーが上下院合同議会でスピーチを行いました。本件に関する情報は世の中に溢れていますので、恐縮ですが割愛させていただきます。

支援額は450億ドル（ゼレンスキーは500億ドルを要求している）ですが、実はこれを含む



●ゼレンスキーの米国議会演説にへばりつく陰の人物(2022年12月22日)

<https://twitter.com/AZgeopolitics/status/1605906131301421057?t=njkl2aWzympp3wqqQV0Yg&s=09>



●タッカー・カーソンがゼレンスキー訪米をケチョンケチョン(2022年12月23日)

<https://twitter.com/i/status/1605978978715865088>

投稿者コメント:タッカー砲＝アメリカ議会にストリップクラブの店長が乗り込んできました「スウェット姿でやって来て、つまみ出されずカネを要求する外国のリーダー」と言う表現でした。



●12月21日のプーチン演説でのウクライナ国民への思い(2022年12月22日)

<https://twitter.com/i/status/1605888381094793219>

ロシアのプーチン大統領は 21 日、ロシア軍のトップが集まる年末の会議で演説し、今起きていることは「私たち共通の悲劇」だと述べた。またウクライナで「特別軍事作戦」を実施している中でも、今もウクライナ国民を兄弟の民族だと思っていると語った。



●ショイグ国防相が今次紛争の原因を改めて語る(2022年12月22日)

ショイグ:「ウクライナでの紛争の原因は、2014 年に西側が資金提供したキエフでのクーデターである」

https://twitter.com/nanpinQD/status/1605564599180279808?t=Eh6D2U08m_pg7gk7DfbLeg&s=09



※安齋注:次のエッセイは、立命館大学国際平和ミュージアムを拠点に活動している市民ボランティア「平和友の会」の会報に安齋が連載している「世相裏表」2022年6月号のもので、ショイグの言う通りでしょう。

ウクライナ戦争の現段階

安齋育郎

◇まだまだ私は「少数派」

ウクライナ戦争が起きた原因は、本稿でも論じてきたように、NATO とその中核としてのアメリカがウクライナの NATO 加盟を推進し、国境を接するロシアに「国家安全保障上の深刻な懸念」を抱かせてきたことです。1962年に当時のソ連がキューバにミサイル基地建設計画を進め、アメリカに「国家安全保障上の深刻な懸念」を抱かせた「キューバ危機」の逆バージョン、いわば、ウクライナを舞台とする「逆キューバ危機」とも言うべき事態であり、これが今次戦争の第一の原因であり、ロシアが「ウクライナの非軍事化」として要求している内容です。

この戦争の危機をつくったアメリカは、今、ウクライナに武器を貸与し、和平交渉への道よりは戦争継続の道を突き進んでいます。果たしてこれは「採るべき道」なのでしょうか？

「プーチン叩き、ロシア・バッシング、ウクライナ頑張れ」コールに満ち満ちた日本社会で、そして、そこそこに「ウクライナ支援募金箱」に遭遇する日本で、私のように「戦争の原因はアメリカにこそある」と主張する立場はまだまだ少数派で、時には感情的ともいえる批判にもさらされます。しかし、私のウクライナ戦争観は微動だにしません。

◇ウクライナ戦争の悲惨さを増長させている原因

戦争はそもそも悲惨で非人道的・反人権の様相を呈しますが、ウクライナ戦争をいっそう悲惨なものにしているのは、アゾフ連隊と呼ばれるネオナチ極右民族差別主義集団の存在です。彼らはウクライナに住むロシア語系民族は「生きる価値のない人間」と位置づけ、ヒトラーの民族浄化思想そのままに、2014年のユーロ・マイダン・クーデターを機に誕生したポロシェンコ親米傀儡政権以来、ウクライナ東南部ドンバス地方のロシア系住民に対する無差別殺戮を続けてきました。それは国連でも問題となり、当時の NHK も、ドンバスで起こっている非人道的殺戮についての国連の討論を紹介する番組で、「ウクライナ代表の説明は支離滅裂だった」と報じたほどでした。ロシアが2022年2月24日に「特別軍事作戦」に乗り出した第二の理由は、「ウクライナの非ナチ化」でした。

もともとアゾフ海に面するマリウポリで民兵集団「アゾフ大隊」として誕生したこの集団は、2014年にウクライナの正規軍に編入されて「アゾフ連隊」となり、NATO やアメリカの訓練や支援を受けて、ウクライナ戦争でも反ロシアの非人道的限りを尽くしています。ウクライナは世界で唯一の「ネオナチを正規軍にもつ国」になりました。

アゾフは次世代の後継者養成や軍事訓練にも取り組んでおり、「人間は撃ってはならないが、ロシア系住民は人間ではないから撃て」と命じている集団です。マリウポリの戦闘では多数の市民を「人間の盾」としてアゾフスターリ製鉄所に立てこもり、市民が「人道の回廊」を通じて避難しようとするのを公然と妨害しました。それでも小集団で避難するや、対社会的には「われわれが市民の避難の世話をした」と宣伝しました。

報じられているように、ゼレンスキー大統領はユダヤ人ですから、ネオナチ集団アゾフからは、アゾフの意に添わない政策に走ったら命も狙われかねないと言われていました。フランス人の人道支援活動ボランティアはウクライナの戦地で、アゾフのメンバーが「ユダヤ人と黒人を見たら皮を剥いでやる」という会話を盛り上げていたという証言を帰国後のラジオ番組で明かしています。「ウクライナの非ナチ化」というロシア側の要求は今次戦争で捕虜となるアゾフ連隊の兵士だけの範囲では収まらず、戦後ウクライナの重大な課題として残るでしょう。

◇「独裁政権」の色彩を帯びてきたゼレンスキー政権

一人の俳優だったゼレンスキー氏が、主役を務めたコメディ「国民の僕(しもべ)」の人気の余勢をかって本物の大統領になり、いきなり政治的・経済的・軍事的にもっとも複雑で困難な戦争という渦の中に放り込まれ、知識も経験も未熟なまま国家の舵取りを委ねられました。不幸と言えば不幸なことですが、彼は「ロシアの国際法違反の侵略戦争に対抗して敢然と戦う大統領」として「ウィンストン・チャーチルにも比肩する英雄」とまで持ち上げられ、各国や国連や各種の国際会議などに招待されあのざっくばらんな T シャツ姿でオンライン演説する姿がしばしば報じられるようになりました。

しかし、ゼレンスキー氏は、彼に対抗する10を超える政党を非合法化し、彼の意に添わないいくつかのテレビ局を廃局にして国営テレビ一局に統合するなど、事実上の独裁政権づくりを進めてきました。そして、自力では闘うすべもない戦争を、まるで「他人の禪で相撲を取る姿」さながらに、「キーウに来るなら手ぶらで来るな。スイートもいらな

い。武器をくれ、武器を！」と連呼し、「闘い続ける英雄的大統領」を演出してきました。しかし、最近、アメリカの『ニューヨーク・タイムズ』でさえ、「ウクライナがロシアに決定的な軍事的勝利を収め、2014年以降にロシアが奪取した領土をすべて取り戻すというのは、現実的な目標とは言えない。…ロシアは依然として強すぎる。…ゼレンスキー大統領とその部下たちに、アメリカと NATO がロシアに立ち向かうには限界があり、武器、資金、政治的支援には限界があることを明確にする必要がある」と言い出しています。アメリカとアゾフの板挟みの中でゼレンスキーがどのような選択をするか—重大な岐路に差し掛かっています。

◇早く和平交渉を！

戦争の第一の原因である「ウクライナの非軍事化」については、ウクライナが「NATO 加盟を白紙に戻し、中立化も排除しない」という方針をとって和平交渉に入れば、出口が見えてくる可能性があります。これを阻害しているのがアメリカとアゾフでしょう。アメリカは武器供与などを直ちにやめ、ウクライナが和平交渉に臨む条件づくりにこそ貢献すべきでしょう。

第二の問題である「ウクライナの非ナチ化」については、和平後に発足する次期政権がアゾフ連隊を国の軍事組織から排除するだけでなく、第二次大戦後のドイツがそうであったように、真剣にネオナチの影響から脱する政策を明確化し、国連を含めて国際的な監視と援助のもとに推進することが不可欠だろう。

●ドネツクのホテルで砲撃を受けたロゴジンの弁(2022年12月22日)

ドネツクでの砲撃で負傷したロスコスモス(ロシアの宇宙開発の国営企業)の元リーダー、ドミトリー・ロゴジンは、誰かが彼の所在に関する情報をウクライナ軍(AFU)に「漏らした」と信じています

彼によると、ウクライナ軍は 12 月 21 日水曜日の 19 時 45 分頃にホテルを攻撃した。

「私たちが直接位置していた場所を含め、いくつかの高精度のヒットがありました」とロゴジンは言いました。

さらに、彼は、ウクライナ軍が建物を攻撃するために 120 または 155 ミリメートルの口径の砲弾を使用したと付け加えました。ロスコスモスの元責任者が強調したように、ボランティアユニットの帰還後、ホテルで「狭い円で」ワーキングミーティングが開催されました。

ロゴジンはまた、過去 8 年間、ウクライナ軍がこの複合施設に砲撃を加えたことはないという事実に注意を向けました。

以前、ロスコスモスの元首長は、ドネツクで受け取った彼の怪我に関する情報を確認しました。医師によると、彼の背骨に当たった地雷の破片は取り除かれていません。

